

井出茂太先生墓畔にて

ここは都立小平霊園37区。やっと探しあてた井出家の墓畔です。「井出茂太 誠徳茂昌居士 昭和四十二年四月十二日没 行年八十七才」と彫られた墓誌と対面しています。

「茂太さん」と呼ばせてくださいな。茂太さんは明治36年4月、若き音楽教師として初赴任が飯田中学校だったのでですね。上野音楽学校で伊沢修二先生から受けた西洋音楽教育に寄せる情熱を力説し、島地五六校長先生に「よし！ その洋琴^{ピアノ}とかいう楽器を買おう！」と決断されました。お手柄でしたねえ。

その洋琴は、最古の国産ピアノとして広く話題になり、ヤマハの好意によって補修調律され、いまは校舎の玄関ロビーに飾られ古式優雅な姿を見せています。

また、茂太さんは国漢の福澤悦三郎先生作「南信健児の歌」の詩句と格調高さに感銘を受け、おのずと曲想弾んで五線譜に……。そのことを聞き知った島地校長が「よし。これは我ら飯田中学の校歌として頂戴する！」と決定。さすが名校長の英断、おみごとですねえ。

飯田中学校をまねて、井出・福澤コンビによる校歌を最初に依頼したのは川路小学校の興津一二三校長先生でした。私は川路村小学校で6年間、そして飯田中学、飯田高校で6年間、合計12年にわたり茂太さんのコンビ校歌をうたい育ちました。心身にしみついているかたつの校歌です。作者に親愛を寄せずにはいられません。

茂太さんは東京都中野区江古田で87年の生涯を終えました。不肖私もいま同年齢ですから、そちらら冥界黄泉国への移籍もそう遠くないでしょう。

「死で人生は終わる。だが繋がりには終わらない」

愛読のノンフィクション『モリー先生との火曜日』（ミッチ・アルボム著・別宮貞徳訳／NHK出版）からモリー先生最後の言葉が今日も蘇りました。では茂太さん、また逢つ日まで。

